利根山光人 記念美術館通信

第77号　平成25年4月24日

〒024－0043　岩手県北上市立花15－153－2
TEL/FAX　0197－65－1808

北上の美術　覚え書き

前号で、北上には平泉文化より以前に彫刻を中心とした素晴らしい美術文化が存在していたということを紹介しました。今号では北上の美術と密接な関係のある岩手県の美術の流れを紹介してみたいと思います。

戦前、大正四（一九一五）年、盛岡在住の画家、清水七太郎、五味清吉、萬鉄五郎、深沢省三などによって七光社という美術団体がつくられ、岩手の美術界をリードしました。その後、昭和になって、平舘清七、髙橋忠弥、小泉一郎、舞田文雄などによって素顔社が創立されます。そして後に七光社と素顔社が合同で展覧会をもつようになります。一方で大正一二年に在京の画家たちが中心となって美術団体北斗会が結成され、在京画家たちの自由な発表の場となります。萬鉄五郎、五味清吉、清水七太郎、深沢省三、松本竣介、澤田哲郎、白石隆一、髙橋忠弥、そして北上の及川文吾などが参加しています。

榊鬼（奥三河花祭）　利根山光人

昭和一六年、太平洋戦争勃発と共に七光社、素顔社、北斗会などが統合されて岩手美術連盟が誕生。戦時統制で戦争協力に走ることになります。

戦後、昭和二二年に岩手美術連盟が盛岡市内丸の県公会堂の地下の一室を借りて、岩手美術研究所を開設。橋本八百二、深沢省三、紅子らによってデッサン勉強会がもたれました。この研究所を足がかりにして、花巻に疎開していた高村光太郎、北上に疎開していた森口多理、橋本八百二などの声がけもあって、昭和二三年に盛岡美術工芸学校が生まれました。校長には森口多理、教授陣には深沢省三、紅子、奈知安太郎、舟越保武、堀江赳、池田龍甫、佐々木一郎などがあたりました。

その後、美術教師を育てる大学の必要性が叫ばれ、昭和二六年に県立盛岡短大美術工芸科が誕生。五年後に岩手大学特設美術科へと発展し、美術科を卒業した学生たちが県内外で活躍することになります。北上からは児玉晃、池田次男、高橋徳美など多くの絵描きを輩出しています。

その間、昭和二四年に岩手美術連盟がその役割を終え、橋本八百二などにより岩手美術協議会ができて春にその展覧会がもたれるようになります。しかし昭和二二年に岩手美術祭が始まり、秋に展覧会を開催していましたので春と秋の展覧会は大変だったのか、いつしか春の展覧会はなくなります。そして、橋本八百二の後を継いで岩手美術協議会の会長となった佐々木一郎の音頭で県立美術館設立運動が始まります。昭和四〇年、「知事を囲む岩手の美術家との懇談会」での岩手の美術家が団体や個人の枠を超えて県立美術館建設に邁進してほしい、という知事の発言が発端となり、気運が高まったということです。

昭和五六年頃に岩手美術協議会を母体として、「岩手県立美術館建設促進の会」が設立されます。佐々木一郎を会長に、副会長に北上画廊の高橋喜太郎があたります。続いて「岩手県立美術館を考える会」も発足、北上から斎藤充司が委員として活躍しています。促進の会、考える会の長年の運動の結果、平成一三年に念願の岩手県立美術館が開館の運びとなるのです。その後は県内外の交流展、企画展、岩手美術祭等の会場となって、岩手の美の殿堂として現在に至っているのです。

なお、岩手芸術祭の審査は橋本八百二、深沢省三、佐々木一郎、伊藤昌夫、そして中央から連れてきた利根山光人など著名な画家たちによって行われていましたが、平成に入ってからその制度が変わり、県内各地から理事を出して、理事たちによる合議制で行われるようになりました。北上からは斎藤充司、沢田忠一、斎藤千香子などが出ています。

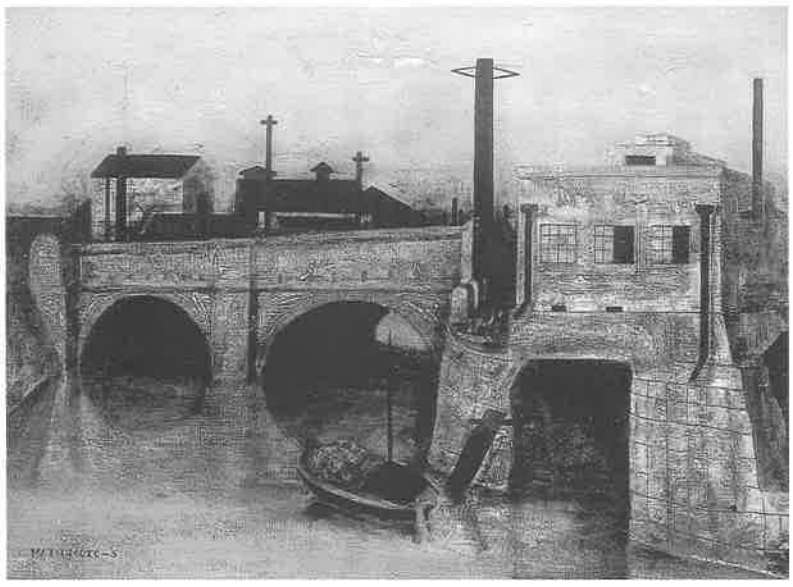
利根山光人記念美術館専任研究員　髙橋　大八

異色美術館訪問記

財団法人　大川美術館

美術に少しでも関心のある人なら、松本竣介という画家を知っていると思う。岩手県立美術館の中に、萬鉄五郎と共に一室を設けられて作品が展示されている岩手県ゆかりの有名な画家である。この松本竣介の作品は岩手県立美術館だけではなく、広く日本中の有名美術館に所蔵されており、有名な大原美術館の中にも納められていて、驚いたことがある。その松本竣介の作品を数多く所蔵している美術館が、群馬県桐生市の財団法人、大川美術館である。

外観は、そんなに大きく感じないが、中に入ってみるとその大きさにびっくりする。大きな展示室が６つも続いていて、第１展示室は常設展示室で、日本の洋画史がわかるように明治の藤島武二から現代の荒川修作までの作品が並んでいる。第２展示室も常設展示室で、ここが松本竣介記念室となっている。松本竣介の作品だけではなく、竣介ゆかりの画家の作品も並んでいる。有名な画家、野田秀夫、国吉康雄、清水登之、難波田龍起、靉光、岩手の萬鉄五郎、舟越保武、そして深沢省三の裸婦像も並んでいて深い感銘を受ける。第３展示室は特選画家室、第４展示室は常設展示室で、日本の抽象画、版画の展示室となっている。第５展示室は常設展示室でヨーロッパの画家たち、ピカソ、ブラック、エルンストなどの作品が展示されている。第６展示室は特別展示室となっていて、私が行った時は「村上肥出夫と放浪の画家たち展」をやっていた。そして吹き抜けロビーにはアメリカ現代絵画が展示されている。



運河（汐留近く）　　松本竣介

この素晴らしい美術館は、織物の町として有名な桐生市出身の大川栄二が寄贈したもので、それを期に市民運動を軸に、市当局の全面的協力により公益財団法人として出発したものである。

大川栄二が長年にわたって蒐集した約6,500点の作品の中心は松本竣介、野田秀夫の代表作を含めた80点だと言われている。それほど大川栄二の心を動かした松本竣介とはどんな画家なのか。作品もさることながら、その生涯も大変劇的な画家である。戦時中にある美術雑誌に「生きている画家」という軍部批判とも受け取れる一文を載せた、当時としては考えられない勇気ある画家なのだ。

松本竣介は明治45年、東京に生まれたが銀行員で岩手生まれの父の都合で幼少の頃より岩手県の花巻、盛岡で過ごしている。盛岡中学に入学してから流行性脳脊髄膜炎にかかり聴覚を失くしてしまう。同学年に舟越保武がいた。

松本竣介は画家を志し油絵の勉強を始め、深沢省三の指導を受けて県展に入選したり、校内美術展で入賞したりしている。その後、盛岡中学を三年で中退して上京、太平洋画会研究所に学んだりして画技を磨いている。そして、麻生三郎、鶴岡政男、靉光等よき友に恵まれ人間味あふれる作品を制作することができた。しかし、生前は無名の画家だった。死後、その作品は脚光をあび、その底光りのする澄んだマチエールで人々を魅了し続けたのである。松本竣介は絵だけではなく、画会を作ったり、雑誌を発刊したりして文章も達者なマルチな人間だった。昭和23年、戦中戦後の無理がたたり、36歳の若さで亡くなっている。しかし、彼の残した珠玉の作品は永遠に残ることと思う。

大川美術館を訪問して、学芸員の春原史寛氏と松本竣介についていろいろ話し合ったことや、後に氏よりお葉書を頂いたことなど懐かしく思い出している。大川美術館は、美術愛好家にはぜひお勧めしたい美術館である。

利根山光人記念美術館
平成25年度企画展

利 根 山 光 人

世界スケッチ歩き

・会　期　　４月１日（月）～５月30日（木）まで
・会　場　　利根山光人記念美術館
・開館時間　午前10時～午後４時
（入館は閉館30分前までに）
・常設展示「東北の祭り」シリーズも同時展示中

メオ族の娘

発行　北上市まちづくり部生涯学習文化課
〒024-0061 岩手県北上市大通り１－３－１
Tel 0197－72－8304　　Fax 0197－63－3121